

河川1 吉野川第一期改修工事(徳島県)

資料名	ストック効果に関する記述
<p>建設省四国地方建設局徳島工事事務所編「吉野川百年史」(建設省四国地方建設局徳島工事事務所、1993年)、440頁</p>	<p>吉野川第1期改修の効果については、もしそれを一言でいうならば、今日の吉野川のすべてを決定した工事というべきである。吉野川の最も重要な幹流区間である岩津下流の全川にわたって根本的な改良工事を施行して、現在はもちろん将来に亘る非常に大きな遺産を残してくれた最初の大工事であったと同時に、おそらく今後はこのような大改修は有り得ないであろう。</p> <p>工事の竣工を間近に控えた大正15年5月に内務省土木局が取りまとめた内容によると、第1期改修の成果を次のように述べている。</p> <p>吉野川の洪水は出水が急激であり、水位の上昇も異常に早いため、度々氾濫に見舞われて、その被害の壊滅的なことを見ないことはなかった。従来からも洪水の防御には非常な苦心をしてきたが、防御施設は一地域の限定したものに止まっており、その効果は小さかった。まさに、「焦慮奔命ニ疲レ空シク狂水の跳梁ニ委スルノ外ナカリキ」であった。</p> <p>しかし、今回の第1期改修工事の統一的な計画に従って、吉野川の左右両岸に堅固な堤防を連続(一部は霞堤または無堤)して築造し、河道内に洪水を閉じ込めることに成功したので、1市5郡に亘る氾濫の心配は解消し、沿岸住民の安全と産業の振興に資する所は極めて大きいものがある。</p> <p>本改修によって得る直接的な利益は次のとおりである。</p> <p>①改修区域内における既往の浸水面積15,000haの内、大部分は浸水を免れるとともに、浸水が避けがたき区域も著しく被害が軽減される結果、従来年々膨大な損害を被っていたが、年平均の被害軽減額は百万円に上る。また、堤内地の田畑地価の上昇は極めて大きいものがある。</p> <p>②第十運河と同樋門の新設によって、下流吉野川筋(現在の旧吉野川)に対する流量調節が可能となったので、沿岸は洪水の危険から免れたばかりか、平常時の流況も良いので大正13年のような夏季渇水時に際しても水不足は起こらなかった。</p> <p>③改修工事に付随して各所の悪水路に逆水防止樋門を新設し、かつその水路を改良したので、本川の洪水の疎通が良くなって高水時間の短縮とあいまって、沿岸低湿地の排水を促進して、荒蕪地の開発利用を図ることができる。</p> <p>④掘削の余剰土を利用して民有地を埋め立てた面積は200haに達する。また善入寺島はすべて遊水地として買収したが、土地利用上は少しも変わらず、占用耕作を継続して常時相当の収穫を挙げている。</p> <p>その他、従来は出水の度に交通運輸、水利、衛生上に及ぼした多くの障害を一掃して、堤防もまた交通路に利用することができる等の効用がある。さらに、最近しきりに提唱される用水、耕地および道路等の改良問題においても、洪水の危険を絶ってはじめてその実際の価値を確保することができるというべきである。</p>
<p>徳島県教育委員会編「徳島県の近代化遺産」(徳島県教育委員会、2006年)、19頁</p>	<p>明治40年から始まった吉野川改修工事のなかで、第十樋門が大正8年に着工され大正12年に竣工した。洪水時にはこの樋門を閉めることで旧吉野川流域は本川の洪水の影響を受けずに済み、災害を減少させることが可能となったのである。</p>
<p>徳島県教育委員会編「徳島県の近代化遺産」(徳島県教育委員会、2006年)、35頁</p>	<p>この第十樋門は、大正8年に着工し、同12年に竣工した。現在も旧吉野川流域の洪水氾濫防止、河川維持用水、上水、工水、農水の供給と、たいへん重要な役割を果たしている。</p>

河川1 吉野川第一期改修工事(徳島県)

資料名	ストック効果に関する記述
上助任町内会編「わかまちよい町上助任」(上助任町内会、1990年)、32頁、34頁	<p>それまで洪水に悩まされつづけてきた沿岸数十か町村は、この工事によって洪水の被害から解放されたのである。(中略)</p> <p>特筆大書しなければならないのは、この吉野川改修のために、犠牲になり祖先伝来の屋敷を手放すことになった先人の心労心痛やるせない無念の心境は察するに余りがある。当時、それなりの補償金をいただいたとは思いますが、さまざまの思いで住みなれた田を離れ、親戚縁者を頼って、転居されたのである。こうした先人の決断によって、立派な堤防ができ安心して生活ができることについて、私たちは感謝しなくてはならない。</p>
秦春一編「応神村郷土誌」(応神村、1958年)、246-247頁	<p>吉野川改修工事前のわが応神村は、この大河の氾濫を防止する為僅かに貧弱な堤防しかなかったので、別記災害史に記した如く毎年大なり小なり洪水の為多大の損害を受け、人畜並に田畑に及ぼす惨害は言語を絶するものがある。(中略)村民は一日も早くこの惨害を防止する工事が出来る事を念願して居ったのである。改修工事が完成したのは、実に本村にとって寔に救いの神といわねばならない。ただこれが為に耕地の一部を失い、又すみなれた家を離れて他へ転居せねばならぬ者もあって相当の犠牲は払ったが、百年の大計の為には止むを得ない事と思わなければなるまい。</p>
加茂郷土誌編集委員会編「徳島市加茂郷土誌」(加茂郷土誌刊行委員会、1992年)、106-108頁	<p>今や両岸の堤防は海に向かって長くのび、沿岸の数10か町村は洪水の被害より解放せられた。(中略)</p> <p>吉野川と鮎喰川の改修によって、加茂町当時の上助任分の農地は河川敷となって、買収立ち退きされた農家も多くその総面積は約120ヘクタール、戸数は字上助任では約100戸、字烏の森(現徳島ゴルフ場のあたり)では25戸、字浜高房では20戸で、これらの土地は全部掘り返されたが、浜高房については、吉野川と飯尾川の堤防に囲まれた三角地帯で、今もなお5戸が農業を続けている。</p>
藍住町史編集委員会編「増補 藍住町史」(藍住町、1965年)、295頁	<p>大正末年に吉野川堤防が完成するまでは、農業用水としての利水よりも、むしろ年ごとの大小洪水の被害になやまされた。築堤後洪水はなくなったが、……</p>
板野町史編集委員会編「板野町史」(板野町、1971年)、828頁、837頁	<p>この工事によって、吉野川を分水する第十樋門、並びに連続大堤防が完成し、ここに初めて沿岸の住民は雨期にも枕を高くして眠ることができた。(中略)</p> <p>ようやく昭和2年(1927)沿岸住民の待望した、連続の大堤防が完成したのである。この時期を境として長い年月の間、洪水に苦しめられてきた沿岸住民は、この長かった水との戦いに終止符をうった。</p>
上板町史編纂委員会編「上板町史 下巻」(上板町、1985年)、668頁	<p>吉野川第一期直轄改修事業は昭和2年(1927)に完成し、20年間にわたる大土木事業によって吉野川は大きく変貌した。両岸の草萌える連続堤は目もはるかに延び、毎年のように襲来する豪雨や台風の洪水によく耐えて、両岸地域の産業・民生の発展向上に大きく寄与してきた。かつては暴威をほしいままにした吉野川の奔流は今や完全に制御されて、酸鼻を極めた水禍の光影は、すでに古老の語り草になろうとしている。</p>

河川1 吉野川第一期改修工事(徳島県)

資料名	ストック効果に関する記述
市場町史編纂委員会編「市場町史」(市場町、1996年)、489頁	<p>多年の念願であった吉野川改修の大工事が昭和二年に完成し、水害を免れることとなった沿岸住民の喜びは測り知れないものがある。ただ、善入寺島民の立退きだけは忘却できないが、その後も起こる大洪水を見る限り、誰もが、貴重な人命や家屋家財の流失を免れ得た価値の大きさを感じている。内務省大阪土木出張所の「吉野川改修工事概説」はその中で次のように記している。抜粋して掲げる。</p> <p>改修ノ効果 (前略)</p> <p>一、改修区域内ニ於テ既往ノ浸水面積一万五千ヘクタール(一万五千町歩)ノ内大部分ハ全然冠水ヲ免レ其避ケ難キ一部ト雖モ著シク被害ヲ緩和セラレ災害ニヨリテ年々蒙リシ莫大ノ損害(年平均百万円)ヲ除滅セラル。又堤内田畑地価ノ増進ハ蓋シ莫大ノ額ニ上ルベシ。</p> <p>(中略)</p> <p>一、堀鑿剰余土ヲ以テ民有地埋立ニ利用シ其成工面積二百ヘクタール(二百町歩)ニ達セリ。又善入寺島ハ全部遊水地トシテ買収セシモ毫モ土地ノ利用ヲ失ハズ地方ニ於テ占用耕作ヲ継続シ常時相当ノ収穫ヲ挙ゲツツアリ。</p>
林町誌編集委員会編「林町誌」(林町、1955年)、560頁、562頁	<p>吉野川築堤は国家の事業でその恩恵は洪水時、人畜、家屋、農作物全般に及ぶ被害を免れ、我町最大の社会福祉である(中略)</p> <p>岩津築堤は大正十三年八月起工して渡船場から鎌保庵前迄約九百米の新堤が三ヶ年後の昭和二年十二月竣工し、現在の道路も出来、地元民は生き返った喜びで林町は築堤記念碑を渡船場に建設した。</p>
名東郡史続編編集委員会編「名東郡史 続編」(名東郡自治協会、1976年)、632頁	<p>(北井上村)</p> <p>この堤防ができた結果、毎年の洪水の厄をまぬがれることができ、雨期に入っても枕を高くして眠れるようになり、田畑の農作も安定することができた。</p>
名東郡史続編編集委員会編「名東郡史 続編」(名東郡自治協会、1976年)、700頁	<p>(南井上村)</p> <p>吉野川の改修工事で大正三年頃吉野川下流の堤防改修が出来たので大水は免れるようになったが村の北端を通る飯尾川の排水が出来ぬため、依然泥海の惨は続いたので関係町村との合議により切開工事に着手した。</p>
石井町史編纂会編「石井町史 上巻」(石井町、1991年)、723-724頁	<p>堤防工事と耕地</p> <p>(中略)築堤第一期工事の再開されたのは明治四十年であったが、藍畑では大正六年に築堤再開になった。昭和二年第一期工事の完成をみた。それ以後、本町では吉野川により耕地が奪われることはなくなって安定した。</p> <p>神宮川入江の埋立て</p> <p>吉野川堤防完成により藍畑村を流れる神宮川入江は廢川の状態になったので、大正時代に内務省の許可を受け、吉野川築堤拡張工事により余った残土を佐野塚裏より運び埋立て事業を行い一六町余の耕地が造成されたのである。このことは石井町の歴史の上でも特筆すべきことである。</p>
高川原村史編纂委員会編「高川原村史」(高川原村史編纂委員会、1959年)、110頁	<p>かくて漸く従来の洪水氾濫の被害から免れ得られるようになり、長年の河水の運搬堆積した肥沃土から生産される農作物は村の主要産物となっている。</p>

河川1 吉野川第一期改修工事(徳島県)

資料名	ストック効果に関する記述
川島町史編集委員会編「川島町史 下巻」(川島町、1982年)、261頁	徳島県としては未曾有の大工事であり、長い間吉野川高水で泣いた沿岸住民にとっては枕を高くして眠り得ることとなったわけで、大きな歓喜となったことももちろんである。(中略) 吉野川改修工事は、徳島県にとって稀に見る大工事であり、吉野川流域住民の多年のガンを除いた大手術であり、……
川島町史編集委員会編「川島町史 下巻」(川島町、1982年)、275-277頁	善入寺島は、吉野川改修工事という大目的の前に消滅した。犠牲といえいい得るであろう。ではこうまでの改修工事は、私たち郷土にどんな利益をもたらしたであろうか。いうまでもなく、郷土の人々の生命財産を守護する大きな役目を担い、将来長く担いつづけたのであって、堤防こそ守護神とあがめてよい大工事であった。善入寺島民の犠牲も、その意味で生きる。 しかし物事には明と暗の矛盾を伴う。吉野川改修工事もまたしかり。善入寺島民三千余人が島を去ったため、川島町商店街が幾分淋れたということは一つの暗である。また大堤防ができたため、私たちの郷土から吉野川に流れる河川すなわち内水が、大洪水の時には吉野川の流水と水位を同じくして排水できず、氾濫して流域に被害を与える事実を生じ、関係住民に苦勞を与えたことは大きな暗である。しかし前者はやむを得ないことであり、後者は内水路の改修、内水排除工事によって防げるし、事実この工事が施行せられたのである。結局、こうした暗は多くの生命財産を守護する上の瑕瑾とみる他はない。これが吉野川改修大工事の社会的意義である。
ふるさと徳島編集委員会編「ふるさと徳島」(徳島市市民生活課、1998年)、147頁	明治四十年に洪水防止に重点をおいた第一期改修工事が着手された。(中略)大正二年佐野塚では改修工事のため一〇〇戸余りが移転、そこに天幅二・三メートル、堤高一〇メートルの堤防が完成、流域の住民は洪水の苦しみから解放されるに至った。
国土交通省四国地方整備局編「吉野川水系河川整備計画—吉野川の河川整備(国管理区間)—」(国土交通省四国地方整備局、2009年)、16頁	明治40年から約20年の歳月をかけ、用地買収約1,140haと多大な家屋移転を要した大事業である第一期改修工事は昭和2年に竣工し、これによって、岩津から河口に至る約40kmの右岸堤防及び阿波市市場町から河口に至る約30kmの左岸堤防が概成して、吉野川の河道がほぼ現在の姿となった。第一期改修工事は吉野川流域に今日の発展をもたらした根幹的治水事業であったといえる。
国土交通省四国地方整備局編「吉野川水系河川整備計画—吉野川の河川整備(国管理区間)—」(国土交通省四国地方整備局、2009年)、21頁	吉野川の第一期改修工事の一環として、明治41年の計画高水流量の全量を吉野川本川に流下させることに変更した計画に基づき、旧吉野川の分派点を第十堰より約600間(1,100m)上流に付け替え、洪水時には締め切り、平常時のみ通水するための施設である第十樋門が国により大正12年に完成した。これにより治水計画上旧吉野川は吉野川本川から分離され、その沿川の洪水に対する安全性は飛躍的に向上した。
国土交通省四国地方整備局編「吉野川水系河川整備計画—吉野川の河川整備(国管理区間)—【変更】」(国土交通省四国地方整備局、2017年)、16頁	明治40年から約20年の歳月をかけ、用地買収約1,140haと多大な家屋移転を要した大事業である第一期改修工事は昭和2年に竣工し、これによって、岩津から河口に至る約40kmの右岸堤防及び阿波市市場町から河口に至る約30kmの左岸堤防が概成して、吉野川の河道がほぼ現在の姿となった。第一期改修工事は吉野川流域に今日の発展をもたらした根幹的治水事業であったといえる。
国土交通省四国地方整備局編「吉野川水系河川整備計画—吉野川の河川整備(国管理区間)—【変更】」(国土交通省四国地方整備局、2017年)、21頁	吉野川の第一期改修工事の一環として、明治41年の計画高水流量の全量を吉野川本川に流下させることに変更した計画に基づき、旧吉野川の分派点を第十堰より約600間(1,100m)上流に付け替え、洪水時には締め切り、平常時のみ通水するための施設である第十樋門が国により大正12年に完成した。これにより治水計画上旧吉野川は吉野川本川から分離され、その沿川の洪水に対する安全性は飛躍的に向上した。

河川1 吉野川第一期改修工事(徳島県)

資料名	ストック効果に関する記述
徳島市史編さん室編「徳島市史 第六巻 戦争編・治安編・災害編」(徳島市教育委員会、2020年)、743頁	吉野川第一期改修工事の効果は、昭和3(1928)年8月の吉野川大洪水で見事に証明された。『高川原村史』は「吉野川改修のため本村被害なし」と記している。若干の被害はあっても、それは耕地に溢れ込まない程度のものであった。吉野川沿岸に住む人々の洪水に対する長い忍従の年月は終わったとはいえないものでも、ひとつの大きな区切りであった。 昭和時代にはいつてからも、9年(室戸台風)・10年・13年・20年(枕崎台風)・23～29年(台風12号)までの暴風雨・34年(伊勢湾台風)・36年(第2室戸台風)と、吉野川はしばしば大型台風の襲来を受けたが、本川の堤防決壊は明治40年9月の洪水以後はない。しかし、その代わりに吉野川の水害は支川や派川、あるいは遊水地帯に移った。
四国の建設のあゆみ編纂委員会編「四国の建設のあゆみ」(四国建設弘済会、1990年)、314頁	昭和2年に完成した第一期改修の堤防は、毎年の洪水から沿岸地域を守り、社会経済産業の安定を図ったが、……
建設省四国地方建設局監修「四国地方建設局三十年史」(四国建設弘済会、1988年)、180頁	昭和2年に完成した第一期改修の堤防は、毎年の洪水によく耐え沿岸各地の発展に大きな役割をはたしてきたが、……
建設省四国地方建設局監修「四国地方建設局二十年史」(四国建設弘済会、1978年)、102頁	昭和2年に完成した第一期改修の堤防は、毎年の洪水によく耐え沿岸各地の発展に大きな役割をはたしてきたが、……
建設省四国地方建設局監修「四国地方建設局十年史」(建設省四国地方建設局、1968年)、91頁	昭和2年に完成した第一期改修の堤防は、毎年の洪水によく耐え沿岸各地の発展に大きな役割をはたしてきたが、……
土木学会四国支部編「四国に豊かさ潤いをもたらした土木事業」(四国建設弘済会、1995年)、61頁	第一期改修工事は、約20年をかけて昭和2年に竣工したが、この工事は現在の吉野川の治水施設の基礎をかたち造った根幹的な事業であり、以後、今日に至るまで吉野川本川堤防の破堤の記録はない。徳島県の昭和以降の社会的、経済的発展を支えたのは、第一期改修工事の成果であり、その後の吉野川治水計画がこの事業の上になっっていることはいうまでもない。